

水 上 勉
帰 山 の 雁

(下)

帰山の雁（下）

一九七六年十一月二十五日 初版発行

著者 水上 勉

発行者 増田 義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

電話 〇三（五六二）四三二一

振替 東京一―三二六 千一〇四

支局 大阪市北区真砂町五三

電話 〇六（三六三）一七〇六

印刷所 大日本印刷

製本所 共 文 堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

© T. Minakami 0093-363631-3214

帰山の雁 (下) 水上勉

実業之日本社



帰山の雁(下)／目次

六章	死人に口なしということ。ならびに、田鶴がカフェー黒猫につとめること。	7
七章	「黒猫」から「天久」につとめ替えること。ならびに左翼くずれの好道坊主に出会うこと。	73
八章	富田たきの死ならびに田鶴、佐一が母の生涯の薄幸に思いをいたすこと。	127
九章	田鶴は農業に専心し佐一は内山愚童の所論を信奉すること。	160
十章	佐一は春光院を脱出して帰山に遁走すること。ならびに京都府警が佐一を追うこと。	202
終章	越後三本木浜に姉弟の死体があがること。	247

装幀／横手由男

帰
山
の
雁
(下)

六章

死人に口なしということ。ならびに、田鶴が
カフェー黒猫につとめること。

義隆と千鶴子の口論は、ふたりの日頃の佐一に処する思量を物語っていた。義隆は佐一の性格をまあ知悉しているつもりだ。修行次第によっては、春光院を継がせる思案もあつて、九歳から養育してきた。禪寺の徒弟教育なるものは、中国の「百丈清規」によって、「日常心是道」の修養を積ませ、当人自身が凡庸人の煩悶と闘いながら出来上つてゆく自己見性の道のりを静観する。これが師の立場である。もつとも祖師語録や經典や、法要や儀式に参加する礼法、^{しづめ}躰は教えはするけれど、どちらかというと、それは瑣末事といわねばならない。精神の不退転を重視するのである。語録は、信心銘、四十二章經、偽山警策、十牛圖、臨濟錄、洞山錄、祖堂集などだが、これらとて、当人に素読は教えるものの、若輩故意味を伝えるところまでではない。写經と素読を強いて、意味は日常の举措におき、折りにふれひき出してみせる。佐一自身も、また般若林中学で、これらの語録は教課に組み込まれて教えられるので、寺へ帰つて、和尚の前で、また読まされるのでは、二重の勉強となる。だから、むしろ、寺院生活は、草取り、めし炊き、汁つくり、薪つくり、本堂内陣、書院、庭園の掃き拭き掃除に専念する。義隆は、ひまがあれば、佐一といっしょに箒をもち、雑巾をもつ。そうして、何かと祖師の行状、語録をまぶして、勤勞の心をうえつける。この教課は試験もなければ、階級もない。同じことを、一日に何となくくりかえすのである。禪寺の小僧の修行が辛勞だというのは、つま

り、倦くなき日常の、こまごましたことにまぶさる禪機の体得が、当人にわかるまで、強制されるところにあらう。義隆は、得度式後の佐一を、承念とよぶ如く、内心では嗣法を得た喜びと、苦勞とを自分にも背負わせている。

ところで、千鶴子は凡庸な俗界出身の女だから、この主従の關係を嫉妬の眼をもつて眺めている。父と子かとも思われる絆が、義隆と佐一のあいだに感じられる。佐一を訪ねてきて、佐一の知らぬまに八坂の真葛原で縊死した越後の男飯田佐吉が、あるいは佐一の実父かもしれぬと思えば、事件の衝撃的であることは言をまたないが、二つも三つも複雑に重なって佐一にのしかかるであらう事の重大さに青ざめる一方で、これを当分は秘密にしておき、時を経てから知らせるのが、当人の修行のためだと義隆にいわれて、しぶしぶ黙っているものの、どこかでそれを佐一に報せて、佐一と夫との間を裂いてみたい気持もある。だが一方で、佐一は、年齢的にいって、少年期から青年期へうつる、むつかしい時期だと思う。大鉢の頭もいっそう大きく、はり出したひろい額は、ニキビをふき出し、声がわりもし、脂っこい首筋や、ふしくれた掌指、怒り肩のうしろ姿は、どうみても、飯田佐吉か、富田弥市の、うるしを搔いた男の血をあらわにしている。眼つきも、多少はかわってきて、隠察へくる時の、どこことなく、眼をすえる態度には、色気づいた少年の、好奇とも、何ともいえない複雑な光りがあった。そのような時期に、松原署の刑事が投げていった石が、どのような波紋をみせるか、心配である。義隆の思慮は、千鶴子の按ずるような、終生秘密にしておくといった意図ではなくて、いまの時期だから、黙っていようといったまでだ。が、この義隆の態度は、千鶴子の妬心をかきたてるのだ。

千鶴子してみると、禪寺の徒弟教育のきびしさは了解できても、あくまでそれは、自分にかわりのない世界であった。佐一が一人前の禪僧となるためには、般若林を卒えたあと、専門道場といわれる僧堂に掛錫し、いわゆる雲水生活を最低三年はおくらねばならない。そうしなければ住職の資格は得られない、ときいていたが、現段階では、佐一は、中学四年生。寺へ帰れば法衣も着て、和尚の代りの勤行、檀家まわりはつとめる。衣をぬげば、在俗少年と寸分かわらないこの少年が、本物にしあがるまでは、まだ未知数の歲月だと思う。正直、千鶴子の眼には、九歳でここへ来た当時から、佐一にどこやら、不可解なところがあると思う。それは将来に、希望をもつ和尚よりも、ある意味では、局外者として傍観している女の眼の方に透視力があつたといえたかもしれない、語録も読み、写経もやり、勤行もつとめる姿をみてはいるが、昨今の佐一の举措には、和尚のいう虚心坦懐さがない。どこやら固い芯をもちあぐねて、迷っているけはいである。その眼は和尚の留守の日など、しょっちゅう顔をあわせていなければならぬ千鶴子にだけ突き刺さるのだ。越前の貧しい農家出身だからという、佐一に劣等感のようなものはある。入寺した時、庫裡にいた千鶴子に、佐一は少年特有の羞恥を感じさせはしたが、慕ってくるような明るさはなかった。頭を下げたまま、上眼づかいになるのは、大頭のせいばかりではなく、こっちの境遇を見透かされている怖さも感じられた。それは今日も、消えずにある。これは千鶴子の佐一への胸襟をひらけなかつた。境遇といえ、千鶴子も、右京区の千本丸太町に母が、兄夫婦といっしょに住んでいるが、入籍されない大黒、つまり、住職の愛人として、同居しているだけにとどまる今日の地位を、冷たい目でみ

られている。実家の者と同じ視線を佐一はみせる。これは、千鶴子にとっては屈辱をともしなう。もつとも、千鶴子は、義隆との約束で、義隆が本山宗務所で、あと、数年の経歴を加えれば、宗務総長の席にすわれて、いちおうの箔もつき、塔頭寺住職としては、出世の部の地位にすわれるまで、正式の入籍は見あわそうと思つてゐる。娘の妙子は、義隆の兄（岐阜県高山市で雜貨屋を経営）の籍に入れているものの、ゆくゆくは、これも鹿内姓に入れ、千鶴子も正妻になる日を心待ちしている。あやふやな境遇を忍ばねばならない事情は、市内のカフェーを転々してきた千鶴子の、過去のふしだらさを警戒しての、義隆の処置ともいえたが、一つは、明治以降、妻帯は大っぴらになつたといふものの、旧來の禪僧らしい持戒生活を固守する管長、老師、塔頭老僧のいる山内氣風を、まだ四十代の義隆が慮おもひつてのことである。宗務本所でかなりな地位にすわれれば、いまの春光院の地位の信用も、固められると義隆は讀んでいる。そのためには、千鶴子との同棲は山内に知れていても、入籍手続をおくらせているのだ。これは、義隆なりの本山宗風への義理だであつて、矛盾した女犯生活をつづける住職は、何も、義隆にはじまつたことではない。五山の庫裡をのぞけばどこでも見られる風景であつた。いわば千鶴子は性具としての価値しかみとめられていない自分を、義隆が佐一を法嗣として嚴格に慈しむ挙措に比較して妬むのである。このあたり千鶴子の女らしさともいえるのだが、立場が立場だけに、業ごうの炎もろがおもてに出て、化粧もろくにせぬ乱れ髪をくしけずり、眼をつりあげていさかうありさまをみても黙つていなければならぬのは、矛盾の生きざまを這う義隆の業苦でもある。

「うちは、和尚さんのいいかげんなところがきらいや」

この時も、千鶴子は、佐一に秘そうとする和尚の態度をなじっている。言外には、自分に対する日頃の、口と心の表裏をなじりたいのであって、それは義隆にとって快いものではない。

「佐一のこととはわしにまかせてほしいな」

と義隆は立って、押入れをあけて白衣を勝手に着はじめた。

「どこへ行かします」

「二条の黒田はんの三回忌や。夕めしもよばれてくる」

不機嫌に帯をしめはじめるが、千鶴子のわきで絵本をよんでいた妙子が夫婦のけわしい空気を察して、走り出てゆく。

「佐一がもどっても、何もいうたらあかんぞ。いうときには、わしから、上手に切りだすさか」

千鶴子は黙らねばならぬ。ほんとうのことを、ありのままに見つめろ、心に起った欲心によって物を見るな。素直なまなざし以外に人の心を打つものはない。義隆のこれは日頃の口ぐせだ。だが、佐一のこととなると、複雑に義隆は方便を活用するのである。

「和尚さんがわからん思うてはっても、あの子はもう大人どす、うすうす知ってるかもしれない」

「阿呆」

義隆は口汚い口調になった。

「刑事も黙ってた方がええいうたし、わしも固う口止めしておいた。あれが知るはずはないやろ。新聞にやってまだ出とらんのに」

金輪際伏せて押しとおす眼つきだった。千鶴子は、義隆が足袋をはくのも手伝わなかった。やがて、義隆は、緋衣の上に薄手の被布をまとして、茶匠のかぶる金襴の丸帽子をもち、「ほな行ってくる」

隠寮を出ていった。咳ばらいが遠さかるのを、千鶴子は見送っただけで、玄関へは出なかった。

佐一が帰って、障下の外廊下に手をついたのは二時間ほどたってからだ。千鶴子は部屋の中で寝そべっていた軀を起し、

「そこ、あけて」

といった。佐一は障子をあける。学生服のまま礼儀正しく膝をそろえている。

「和尚さんは、黒田はんの三回忌でおよばれや」

千鶴子はいった。

「作務のこというてかれませんでしたか」

「なんも、いうてからへなんだ、休みおし。庭やってきちんとしてるし、かまへんや。お部屋でよこになってない」

「……………」

佐一は、脂ぎった顔を、心もちやわらげ、ひっこんだ眼を伏せた。

その顔は、何も知らない、無心なものに思える。千鶴子は、むらむらと、しゃべりたい衝動をおぼえた。義隆には背信だが、しかし、この背信はいま理が立つように思えた。これは、佐一を思えばこそその報告ではないのか。いつかは知れることを、黙り通すわけにゆかない。あとで恨まれるのはわかっていても、ここで、義隆を裏切って、真実を告げてやるのが、一つはこの少年への、千鶴子の秘かな義理である氣もする。

「あのな」

千鶴子は、口もとがふるえる。

「これは和尚さんにいうてもらうと困るねんやけどな。うちが、黙っとれいわれたことを教え上げるのや、あんたも、黙っててほしいねやけど」

千鶴子はそういったことで、いくらか楽になった。佐一はじっと眼をすえている。

「こないだあんたとこへ来たお客さん」

「……………」

「越後から来はった飯田佐吉さんのことや」

「……………」

佐一の眼は光った。

「あの人……気の毒なことに、京で死んではった」

口から、ウツとひとつうめきが出た。千鶴子は一瞬、軽はずみな自分がわかって息をとめ

た。だが、義隆への新しい復讐が芽ぶくのがわかった。かまわない、かまわない。いってしまった方がいいのだ。佐一のためになるのだ。

「きょう、松原署の刑事はんが来やはってな。和尚さんと書院ではなししてはったのをきいたけど。かわいそうに自殺らしいねんな」

「……」

佐一はついていた手をひいて、きらりと眼を大きくむく。

「和尚さんは、あんたにかくしとこいわはったけどな。どうせ、新聞に出るやろし。それに、あんたとは何もかわりのないことやしな、うちは教えといてあげた方がええ思うて」

「なんで、飯田さんが……死なはったんですか、なんで……」

佐一はふるえ声でいった。

「そら、あてにもわからん。和尚さんにも、刑事さんにもわからん。けど、うちが思うに、越後を出てきやはったのには、わけがあったのやろ。遠縁のあんたに一ト目会うて、あんたの息災な姿をみてから死にとうならはった……事情はうちらにはわからんけど、あんたが、かわいそうで、かわいそうでかなわんねやな。和尚さんにないしよでこんなこというてかんにんしてや。飯田さんの遺骸は、もう焼いてしもて、警察から、越後へ送るかえさはるとこらしいけど、……かわりのないあんたが、かわいそうで、なんでそんなおそろしい遠縁の人をもったのやろと……気の毒でなア」

千鶴子は正直、そういつているうちに、臉へこみあげてくる熱いものがわかった。鼻をすす